

ヨーロッパ諸国の博物館視察（3）

著者	大給 近達
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	4
ページ	884-886
発行年	1977-01-14
URL	http://doi.org/10.15021/00004630

ヨーロッパ諸国の博物館視察

(3)

大 給 近 達*

スウェーデンにおける滞在が3日間に限られていたため、最初に野外博物館として有名なスカンセンを訪れた。

スウェーデン スtockホルム
スカンセン (Skansen)

ストックホルム市の東南、約1キロ離れたユールゴーデン (Djurgården) 島にはノルディスカ博物館 (Nordiska Museet) をはじめ、バーサ号博物館 (Wasavarvet)、遊園地などがスカンセンをとり囲むように並んでいて、周囲の自然環境にふさわしい知的な一つのセンターを形成している。

スカンセンはこの島の小高い丘の上にあって、17世紀以来、ストックホルムの防衛のため築かれた方形の砲壘から名付けられた。博物館の創立は言語学者であるアルツール・ハゼリウス (Artur Hazelius) が個人の資力で、スウェーデン各地方の中世農家を収集し移築したことから出発したものである。実際に博物館として開館したのは1891年、ノルディスカ博物館の付属分館としてスタートした。

わが国でも戦後、川崎市や豊中市に民家集落の野外博物館がつくられるようになったが、その規模と質ではスカンセンに遠く及ばない。

スカンセンの野外博物館としての特色は家屋の保存とともに、古い伝統を受け継いできた生活の保存にも力を注いでいることである。そのことは「物」を中心とした従来の保存から「人間と物」を結びつけた生活、技術の保存として、博物館の新しい機能を生みだしたことを意味する。スカンセンの出口に近いスターズクバテレーレット (Stadskvarteret) は17世紀から19世紀に存在した家並とその生活を復原したものであった。わたしの訪れた時は北欧の冬が深く、観光シーズンではなかったために家並の店は一部開店しているだけであった。そのなかで、ガラス工場はソーダガラスを原料とした伝統的な容器を製造しながら、そこで出来上がった製品を販売していた。ここで働く職人の多くは高令者であったが、若い青年も技術を習得するために弟子入りをしていた。近くの印刷工場ではグーテンベルグの印刷機を想像することができそうな大仕掛けな木製の印刷機で、木版の「結婚に関する十戒」を5色で美しく刷り上げていた。ここには3名の親方が勤めているが、ストックホルム市内の印刷業を譲った後の余世を実に楽しそうに送っていた。パン屋では古来からのイーストを入れないパンを焼いていた。このパンはスカンセンに来る観光客だけが買手ではなく、ストックホルム市民も昔をなつかしむ気持ちでわざわざ買いに来るということであった。開店している店はどこでも自由に見学することができ、当時の服装

* 国立民族学博物館第4研究部

をした職人や店員が働きながら客の質問に答えてくれる。スカンセンはさながら映画のセットを思わせる景観であるが、夜間を除けばここは映画のセットと違って、生きている町であった。職人は伝承されてきた技術の保存に誇りを持っており、手仕事は人間に許された神の意志の実現だとガラス工場の親方は説明してくれる。スカンジナビヤ半島の最も近代化の進んでいるスウェーデンで、技術に関する職人の考え方がいろいろ聞いたことは予想もしていないことだった。今回はスカンセンの野外博物館展示についてキュレーターから話を聞くことはできなかったが、展示館である農家や工場に勤めている従業員と直接話をすることができたのが収穫であった。スカンセンの訪問をふりかえって、博物館の使命は物を通じて最終的には背後にある「ところ」までも伝えていく分野があることを実感として得たように思う。

ノルディスカ博物館

(Nordiska Museet)

スカンセンと同じくアルツール・ハゼリウスの創立になるもので、歴史・民族博物館としての性格が強く打ち出されている。この博物館が創設された19世紀後半はスウェーデンにとってナショナリズムが頂点に達した時期でもあった。そのことを反映するように歴史的展示品は主に16世紀以降の国王や貴族の使った武具や兵器などが壮大に飾られ、ノルウェーを属領にしていた当時の国旗が正面に掲げられていた。北欧の歴史が領土問題と結びつくとき、国旗に象徴される展示は難しい問題をかかえていると思われた。わたしが今回歩いたヨーロッパ諸国では

隣接諸国に対する民族感情はむしろ悪い所が多かった。その中で、とりわけこのノルディスカ博物館の展示はスカンジナビヤ半島におけるスウェーデン国民の感情を生に表現し過ぎているように思われる。民俗部門のキュレーターにその点を尋ねてみたが、国際的關係には余り配慮を行っていないが、歴史的象徴品としてはこれで構わないのではないかという返事であった。

民俗部門はこの博物館の最も特色をもつ部門であろう。スウェーデン国内の家具、道具、装飾具、衣服、工芸品は各地方、時代にわたって広範囲に収集されている。とくに家具に関しては、オランダの国立博物館で展示されたのと同じように一部復原した部屋の中に、家具が時代と地域を考証しながら配置されている。博物館の説明でも、この家具の考証が10年以上も年月を費す大事業であったということである。一見素朴な農民の家具にも地方によって多様なデザインがある。わたしが訪問した日には家具や衣服の考証を行っているキュレーターに面会できなかったが、この博物館の研究として行ってきた家具に関する文化要素の分布図も既に完成しているということであった。キュレーターとの話がたまたまわたしたちの国立民族学博物館の収集に移ったとき、ノルディスカ博物館はスカンジナビヤ半島を代表して民具の収集に協力しますと約束してくれた。しかしそのためには従来の研究をもとにして、なるべく質のそろった標本を収集しなければならないので1年以上の期間が欲しいということであった。誠に良心的な申出なので今後のわが館の収集には将来頼もしい援助が期待できそうである。ヨーロッパの先

進国を対象とする民族資料の収集には、生活用具の考証や地方的特色を熟知している博物館民俗部門の協力はこれから欠くことのできない条件になるであろう。わが館が日本国内の標本を収集する場合、一品収集から次第に地域別コレクション収集に移行しつつある。その折、各地の郷土資料館や関係者の助言や援助があらゆる意味で重要になってきた。一つには無差別な収集が地方の文化財の散逸につながり、国立・地方の博物館のコントロールが必要であるし、二つには生活用具の考証に精通しているからである。これと同じことが外国先進諸国での収集に言えよう。

展示の説明、解説についてはとくに新しいものは見出せなかった。ノルディスカ博物館は国内の自民族を対象としているため、民俗部門は時代と地域と内容を明記するだけで、外国人が理解できない点も多くあった。しかし、歴史や民俗の

特色について、外国人来観者に対する情報サービスは、不定期発行の英文タイプ印刷の簡単なものが用意され、受付で無料配布を行っている。

展示の構成については、家具のコーナーのように復原展示を行っているが、全体として要素別に分けすぎている関係から地方のサブ・カルチャーが立体的に浮び上ってこない欠点がある。比較する展示構成はともすると博物館の意図から離れて、遊びや独りよがりになり終り易い点も、この種の民俗部門では警戒すべきことだろう。

スウェーデンを最後にヨーロッパでの博物館視察を終えた。メキシコにおける人類学博物館視察は昭和51年度カナダ、アメリカにおける調査と収集の業務が終了してから、改めてアメリカ大陸の博物館として報告していく予定である。